

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22652042

研究課題名（和文） 国際的共有知財としての漢文訓読に関する戦略的研究

研究課題名（英文） Strategic research on kanbun kundoku as common intellectual property

研究代表者

小助川貞次 (KOSUKEGAWA TEIJI)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：20201486

研究成果の概要（和文）：漢文訓読は日本以外の漢字文化圏でもそれぞれの言語で行われていた言語活動であるが、一般社会における認識は極めて低く、また漢文訓読に関する学術用語の国際的共有も進んでいない。本研究では国内外の研究者と連携・協力しながら「国際的共有知財としての漢文訓読」というテーマのもとで問題解決を試み、「漢文訓読用語集」（日本語・韓国語・英語・イタリア語）の公表（共著）と「東アジア漢文訓読史概説」の大学教育での実験を行った。

研究成果の概要（英文）：

The practice of glossing Chinese texts to make them readable in the vernacular was not unique to Japan. It occurred in the countries of the Sinosphere. However not only the general public's awareness of this fact but also the international sharing of academic terms of *kanbun kundoku* have not been making headway. This study challenges to solve the theme of "strategic research on *kanbun kundoku* as common intellectual property" in conjunction with some scholars in Japan and abroad. It makes publishing "A core vocabulary on vernacular reading of Chinese Texts" (co-authored), and having an experimental lecture of a historical outline of *kanbun kundoku* in the Sinosphere at university education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	0	1,400,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,400,000	300,000	2,700,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：漢文訓読・共有知財・学術用語・高等教育環境・漢文訓読史概説

1. 研究開始当初の背景

漢文訓読が日本以外の漢字文化圏でも行われていたことは、1960年代後半から知られており、特に2000年に韓国で発見されたヲコト点資料（点吐口訣資料）は、漢文訓読の国際的研究を飛躍的に発展させる大きな契機となり、国際共同調査や国際学会が頻繁に開催されている。

しかし、このような漢文訓読の国際的研究とその意義は、専門的な事典を除けば一般社会ではほとんど認識されていない。特に高等学校における必修科目「国語総合」の教科書や日本を代表する国語辞典で全く取り上げられていないという事実は、社会的認知の低さを如実に示している。この背景には、漢文訓読研究が国際的に行われても、そのイニ

シアティブは日本にあるという誤った認識がある。このことは漢文訓読に関する術語の翻訳においても顕著で、日本語を単にローマナイズしただけの術語や漢文訓読に精通しない単なる対訳・直訳、日本語における意味・用法の「ずれ」が検討されないままの翻訳など、危機的状況と言える。その結果、国際共同調査や国際会議などで意思疎通ができなかったり、論文の翻訳に時間を要したりと、漢文訓読研究を国際的に推進する上で大きな障害となっており、国際社会におけるポジションは他分野と比べて格段に劣っている。

研究代表者は漢文訓読について国際的な視点から研究を継続し、海外の研究者とも密接な協力関係を構築してきた。また大学教育においても漢文訓読の最新成果を積極的に取り上げ、社会的な理解と共有を目指して教授法・教材の開発にも取り組んできた。しかし、このような一般社会における認識の欠如や国際社会におけるポジションの低さなどの現状を見ると、もはや日本人研究者だけがイニシアティブを取る研究方法には限界があり、むしろ漢文訓読に強い関心を持つ外国人研究者といかに共同研究できるかが重要なカギになると思われる。そのためには漢文訓読とそれに関わる研究活動を「国際的共有知財」という新たなパラダイムの中で捉え直すことが必要で、これによって従来の研究成果が社会的にも国際的にも格段に浸透し、さらなる進展も期待できる。

2. 研究の目的

本研究は、漢文訓読とそれに関わる研究活動を「国際的共有知財としての漢文訓読」という新たなパラダイムの中で捉え直し、国内外の研究者と連携・協力することで、漢文訓読研究が直面する問題を解決しようとする戦略的な取組である。具体的には、漢文訓読に関する国際的調査・研究で最も障害となる学術用語の問題解決と、その背景にある一般社会における理解・共有の確立を目指し以下の事業を行う。

- (1) 漢文訓読用語集（多言語対応版）の作成とその基礎となる実地調査
- (2) 高等教育環境の整備（「東アジア漢文訓読史概説（電子テキスト版）」作成）と実験
- (3) 研究成果を「漢文訓読」の項目にまとめてウィキペディアへ記載

3. 研究の方法

研究期間は緊急性とこれまでの研究成果が展開できることから2年間とし、研究期間内に研究目的(1)(2)(3)の三つの事業を順次展開する。

【平成22年度（初年度）】

(1) 漢文訓読用語集（多言語対応版）の検討とその基礎となる実地調査

研究組織の一員が、すでに第101回訓点語学会（平成21年10月18日）で「漢文訓読用語の国際的共有について」を発表し、漢文訓読に関する日本語の基礎用語27語（関連用語を含めると57語）について韓国語、英語、イタリア語訳を提案した。初年度は、「漢文訓読用語集（多言語対応版）」拡充の準備期間として、それぞれの言語における訳語の典拠を再検討するとともに、訓点語学会機関誌『訓点語と訓点資料』と韓国口訣学会機関誌『口訣研究』を対象とした漢文訓読用語の抽出作業を行う。合わせて漢文訓読用語の基礎となる漢文訓読資料（訓点資料）の実地調査を東京国立博物館と京都国立博物館で行う。

(2) 高等教育環境の整備（「東アジア漢文訓読史概説（電子テキスト版）」作成）と実験準備

高等教育の現場では漢文訓読の実証的研究成果がほとんど扱われず、授業を展開するための教材もほとんど存在しない。研究代表者は、数年来この問題について日本と韓国の学会等で度々指摘しており、国立大学での実践経験も豊富にある。初年度は、これらの研究成果と経験に基づいて、「東アジア漢文訓読史概説」の電子テキスト（試行版）の作成と授業内容をフィードバックするための評価システムを構築する。

【平成23年度（最終年度）】

(1) 漢文訓読用語集（多言語対応版）の拡充とその基礎となる実地調査

前年度の訳語の検討作業と漢文訓読用語の抽出作業に基づき、「漢文訓読用語集（多言語対応版）」を日本語の基礎用語で50語（関連用語を含めると100語）まで拡充する。また、引き続き漢文訓読用語の基礎となる漢文訓読資料（訓点資料）の実地調査を東京国立博物館と京都国立博物館で行う。

(2) 高等教育環境の整備と実験実施
前年度作成した「東アジア漢文訓読史概説」の電子テキスト（試行版）を富山大学共通教育（教養原論）及び札幌大学教養基礎科目（日本語論）で実施する。また授業内容を学生の視点から評価して、「東アジア漢文訓読史概説」の電子テキスト（修正版）へ反映させる。

(3) 研究成果を「漢文訓読」の項目にまとめてウィキペディアへ記載

以上の研究成果の概要を「漢文訓読」の項目にまとめ、韓国語、英語、イタリア語に翻訳した上でウィキペディアに記載し、国際的共有知財として広く国際社会に還元・提供する。

4. 研究成果

(1) 漢文訓読用語集（多言語対応版）の検討とその基礎となる実地調査

①検討結果を連携研究者・研究協力者と共著

で海外学術誌 (SCRIPTA, Seoul) に投稿した (平成 22 年度)。さらにこの成果を踏まえて、日本の訓点研究の範囲と展望について、連携研究者・研究協力者と共同で第 13 回ヨーロッパ日本研究協会国際会議 (EAJIS) において英語による口頭発表を行った。また「漢文訓読史概説の構想」(単著、『富山大学人文学部紀要』第 55 号、2012 年 3 月) について研究協力者の協力を得て英語訳及び韓国語訳した (平成 23 年度)。

②漢文訓読用語の抽出作業

訓点語学会における研究発表会題目 708 件と機関誌『訓点語と訓点資料』の題目 599 件を Excel ファイルによってデータベース化した (平成 22 年度)。訓点語学会における研究発表会題目 (前年度からの累計 725 件) と機関誌『訓点語と訓点資料』の題目 (前年度からの累計 629 件) を Excel ファイルによってデータベース化した (平成 23 年度)。

③実地調査と討論

2010 年 8 月、2011 年 2 月、2012 年 7 月に海外研究協力者と京都国立博物館において実地調査と漢文訓読用語についての討論を行った。また、2011 年 11 月にはフランス国立図書館において漢文訓読資料補充のための実地調査と海外研究者と情報交流を行った。

(2) 高等教育環境の整備 (東アジア漢文訓読史概説 (電子テキスト版) の作成) と実験 2010 年 4 月より富山大学教養教育・言語と文化「未知世界への挑戦ー東アジア漢文訓読史の構築ー」(前期火 1 限、全学部 1 年生対象、履修者 139 名) を開講し、PowerPoint による教材製作と双方向確認カードによる講義内容・理解内容の客観的把握を行った。これを踏まえて、2010 年 7 月に国立国語研究所において研究発表「漢文訓読史研究を学ぶ学生の視点」を行い、さらに 2011 年度用の改訂版双方向確認カード (図 1) を設計した。

2012 年度 (□前期 □後期 □集中) 確認カード

使い易い筆記具 (H 以上) を使用し、ていねいに記入して下さい。このカードは半年間使います。

教員	科目	曜 時限	産原イメージ 星形	
学部		コース (分野)	年	
学籍番号		氏名		
月/日	3つの重要キーワード 詳しく感じたら →■	感想や質問など自由に	教員からのコメント	抜 印
1回目 課後 /	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>			
2回目 課後 /	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>			
3回目 課後 /	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>			
4回目 課後 /	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>			

図 1 改訂版・双方向確認カード

2011 年 4 月より富山大学教養教育・言語と文

化「漢文訓読の世界」大図解」(前期木 2 限、全学部 2 年生対象、履修者 137 名) 及び富山大学人文学部・日本語学特殊講義「東アジア漢文訓読史概説」(前後期月 2 限、人文学部 2 年生以上対象、履修者前期 73 名・後期 63 名) を開講し、PowerPoint による教材製作と双方向確認カードとその電子記録 (Excel ファイル) による講義内容・理解内容の客観的把握を行った。これらの内容を踏まえて「漢文訓読史概説の構想」(『富山大学人文学部紀要』第 55 号、2012 年 3 月) を発表した (図 2、図 3)。

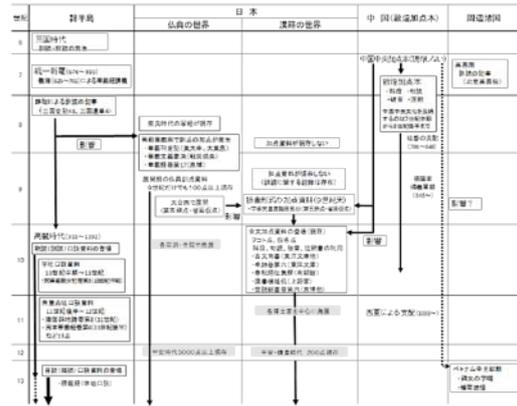


図 2 東アジア漢文訓読史関係図

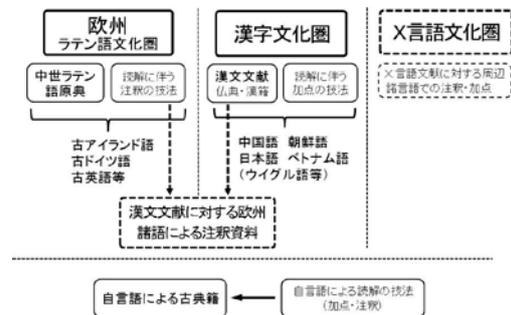


図 3 訓読概念の広がり

(3) 研究成果を「漢文訓読」の項目にまとめてウィキペディアへ記載 漢文訓読の各項目について検討を行い、特に「句読点」の内容・機能に関して国内外の漢文訓読資料の実地調査とその分析に基づいて口頭発表「漢文訓読資料における句読点について」(第 102 回訓点語学会、2010 年 5 月)、「句読点の機能から見た漢文訓読」(日韓言語学会会議、2010 年 11 月)、論文発表「句読点の機能から見た東アジア漢文訓読史」(『訓点語と訓点資料』第 127 輯、2011 年 9 月) を行った。さらに漢文訓読の各項目を国際的に共有するために「(講演) 日本における漢文訓読の流れー論語訓点本を中心にー」(ソウル大学校奎章閣、2011 年 7 月 7 日、韓国語通

訳付)、「漢籍訓点資料」(第13回ヨーロッパ日本研究協会国際会議、2011年8月27日、英語)の口頭発表を行った。ウィキペディアへの記載に関しては実現に至らなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①小助川貞次、東アジア学術交流史から見た漢籍訓読の問題、日・韓訓読シンポジウムー平成21年～平成23年開催報告書ー、査読無、2012、28-39

②小助川貞次、漢文訓読史概説の構想、富山大学人文学部紀要、査読無、第56号、2012、109-121

<http://160.26.62.22/kenkyu/kiyo56/kosukegawa56.pdf>

③小助川貞次、句読点の機能から見た東アジア漢文訓読史、訓点語と訓点資料、査読有、第127輯、2011、1-10

④John Whitman, Miyoung oh, Jinho Park, Valerio Luigi Alberizzi, Masayuki Tsukimoto, Teiji Kosukegawa, and Tomokazu Takada, Toward an International Vocabulary for Reserach on Vernaculary Readings of Chinese Texts (漢文訓読 Hanwen Xundu), SCRIPTA, 査読有, vol.2, 2010, 61-83

[学会発表] (計7件)

①小助川貞次、古写本・古刊本における巻末字数注記について、第105回訓点語学会、2011年10月16日、東京大学山上会館(東京都)

②小助川貞次、Kunten Texts of Secular Chinsese Origin (Kanseki 漢籍)、ヨーロッパ日本研究協会国際会議(EAJS)、2011年8月27日、タリン大学(エストニア)

③小助川貞次、(講演)日本における漢文訓読の流れー論語訓点本を中心にー、2011年7月7日、ソウル大学奎章閣(韓国)

④小助川貞次、漢文文献の階層構造(注釈構造)と朱点との関係について、第104回訓点語学会、2011年5月22日、京都大学文学部(京都市)

⑤小助川貞次、句読点の機能から見た漢文訓読、日韓言語学会会議ー韓国語を通じた日韓両国の相互理解と共生ー、2010年11月13日、麗澤大学(柏市)

⑥小助川貞次、漢文訓読史研究を学ぶ学生の視点、国研・共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」研究発表会、2010年7月9日、国立国語研究所(立川市)

⑦小助川貞次、漢文訓読資料における句読点について、第102回訓点語学会、2010年5

月23日、京都大学文学部(京都市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

小助川 貞次 (KOSUKEGAWA TEIJI)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：20201486

(2)研究分担者(該当なし)

(3)連携研究者

月本 雅幸 (TSUKIMOTO MASAYUKI)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：60143137

高田 智和 (TAKADA TOMOKAZU)

国立国語研究所・理論構造系・准教授

研究者番号：90415612

渡辺 さゆり (WATANABE SAYURI)

札幌大学・文化学部・教授

研究者番号：10382459

(4)研究協力者

呉美寧 (OH MI-YOUNG)

韓国崇実大学校・日語日本学科・副教授

朴鎮浩 (PARK JIN-HO)

韓国ソウル大学校・国語国文学科・助教授

John Whitman

国立国語研究所・教授

Valerio Luigi Alberizzi

東京大学大学院・外国人研究員